

中国人大学生における属性集団への集団自尊感情が ストレスコーピング, ストレス反応, および個人自 尊感情に与える影響

申, 銀女
九州大学大学院人間環境学府

井隼, 経子
九州大学ベンチャービジネスラボラトリー

中村, 知靖
九州大学人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/18439>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 11, pp.1-7, 2010-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

中国人大学生における属性集団への集団自尊感情がストレスコーピング、ストレス反応、および個人自尊感情に与える影響

申 銀女 九州大学大学院人間環境学府
井隼 経子 九州大学ベンチャービジネスラボラトリー
中村 知靖 九州大学人間環境学研究院

The effects of collective self-esteem for ascribed group on stress coping, stress reaction, and personal self-esteem in Chinese undergraduates

Yinnu Shen (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Keiko Ihaya (*Venture Business Laboratory, Kyushu University*)

Tomoyasu Nakamura (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

It is well-known that collective self-esteem for a group that we belong to is related to the modulation of our stress. In China, collective self-esteem for achieved groups has been investigated, whereas that for ascribed groups has not. Thus, the present study examined the relationship among personal self-esteem, stress coping, stress reaction, and collective self-esteem for ascribed groups by measuring these factors in Chinese undergraduate students. The undergraduate students ($N=358$) responded to four questionnaires that measured these factors. As a result, collective self-esteem for ascribed groups was found to be significantly correlated with personal self-esteem, stress coping, and stress reaction. Taking account of these results, we discussed the effects of positive and negative evaluations for ascribed groups on stress reaction.

Key Words: collective self-esteem, coping, stress reaction, personal self-esteem

問題と目的

社会の中で適応的に生活するためには、自らの属する集団との関係性が非常に重要である(浅川・東・古川, 2001)。我々は集団に属することで社会的アイデンティティを形成する(Tajfel & Turner, 1979)。この社会的アイデンティティは、個人がある社会的集団に属しているという認識、あるいはその集団の成員として形成する価値観や情緒的観念により成り立ち(Tajfel, 1981)、自らの属する内集団と、それ以外の外集団とを明確に区別することにより維持される。このような社会的アイデンティティを持つことにより、集団に帰属し、集団を維持してゆく動機づけがなされる(Sherman, Hamilton, & Lewis, 1999)。

集団は、“属性集団”と“達成集団”とに大別される(Parsons, 1940)。属性集団とは、例えば性別、民族、血縁関係など生まれながらに決定され、自己の努力では変えることができない集団である。一方で達成集団とは友人グループ、学校、会社など何らかの目的達成のために個人の行動によって獲得された集団である。

これまで、所属集団における社会的アイデンティティの強さや望ましさを測定するため、属性集団に着目した

集団自尊感情(collective self-esteem : CSE)尺度が開発されてきた(Luhtanen & Crocker, 1992)。これは集団への同一化、集団に対する自己評価、集団に対する他者評価の認知、成員性の四つの要因を測定するものであった。日本でも渡辺(1994)がLuhtanen & Crockerの尺度を翻訳し、集団自尊感情が成員性と集団への同一化、そして集団に対する否定的評価と肯定的評価という四要因からなることを明らかにした。

中国ではZhang & Liang(2002)がLuhtanen & Crocker(1992)の尺度を翻訳し、中国語版集団自尊感情尺度を作成した。彼らは“属性集団”を“スポーツチーム”と置き換え、達成集団における集団自尊感情を検討した。その結果、集団自尊感情がアスリート達の生活や試合に関する満足感を高めることを明らかにした。またXue & Li(2007)は達成集団として“クラス”を用い、集団自尊感情が大学新入生の抑うつ及び不安の予測に有効であることを示した。さらにHong(2009)は集団自尊感情が集団に対してポジティブな評価をもたらし、成員としての責任感を増大させ、集団に対する拒絶や疎遠行動を抑制させることを明らかにした。

集団自尊感情は個人の抱えるストレスとも密接に関係している(Sánchez & Vilain, 2009)。達成集団によるス

トレスはその集団から離れることで軽減されうる。しかしながら属性集団は生まれながらに決定づけられたものであり、そこから離れることは難しい。また、集団には達成集団と属性集団との相互作用が考えられ、達成集団のみならず、属性集団がストレスの解決に大きく関わっている (Sánchez & Vilain, 2009)。例えば、属性集団としての集団自尊感情は異文化適応におけるストレスと関係していることが分かっている (Liang & Fassinger, 2008)。Liang & Fassinger は、友人やコミュニティといった達成集団よりも、異文化圏におけるアジア系アメリカ人であるという属性集団としての集団自尊感情が、異文化適応におけるストレスの軽減や個人自尊感情 (personal self-esteem : PSE) の維持に深く関わることを示した。

このように、民族、性別あるいは血縁関係といった不変の要素に対するストレスと属性集団における集団自尊感情とは深く関わるものであるといえる。また属する集団は、制限や圧力などのストレスサーになりうるといった反面、属することによる安心感や一体感などストレス防止や緩和の役割も担っている (Goldschmidt, 1974)。そのため、属性集団における集団自尊感情とストレスとの関連を検討することは、個々人の精神的健康においても非常に重要な課題であると考えられる。

中国国内の先行研究では、達成集団における集団自尊感情を扱っていた。しかしながら、達成集団における集団自尊感情の測定には、達成集団は個人間の差異が大きくなり捉えづらいこと、また達成集団における集団自尊感情には個人自尊感情が混在し、両者を明確に分けて捉えられないといった問題が指摘されている (Luhtanen & Crocker, 1992)。現在中国の集団自尊感情研究でも、属性集団と達成集団とを明確に区別した検討は行われておらず、Luhtanen & Crocker の述べる問題点を孕んだものになっている可能性がある。

また、中国は多種の民族が存在しており、国内でも民族間において、国外で留学生が感じる異文化不適応に似たストレスを感じることもあるだろう (小嶋, 2008)。しかしながら中国人留学生に対する異文化不適応のストレスは検討されているが、中国国内の学生に対する民族間相違により生じるストレスについては検討されていない。属性集団と達成集団とを明確に区別し、属性集団における集団自尊感情を捉えることは、多民族国家であり、また海外に多くの人材を輩出する中国にとって重要な課題である。これらの問題を解決することにより、民族間の相互理解及び異文化不適応によるストレスの解決につながると考えられる。

そこで本研究では中国人の属性集団における集団自尊感情を測定し、個人自尊感情、ストレスコーピング、そしてストレス反応との関連から妥当性を検討した。自ら

の属する集団を肯定的に評価する者、あるいは自己の所属する集団が他者から肯定的な評価を受けていると考える者は所属する集団への満足感が高く、それにより個人自尊感情も高くなる (Zhang & Liang, 2002)。また、積極的に問題解決に取り組む傾向も強い (Goldschmidt, 1974)。よって属性集団における集団自尊感情は、ストレスコーピング、ストレス反応、そして個人自尊感情と関係していると考えた。

方 法

調査協力者 中国吉林省の大学生 358 名 (男性 101 名, 女性 248 名, 不明 9 名)。

調査時期 2009 年 4 月に実施した。

手続き 調査は講義の一部を利用して集団で実施した。

尺度構成 集団自尊感情の測定のために、Zhang & Liang (2002) の集団自尊感情尺度の 16 項目を用いた。このとき、本研究では、「スポーツチーム」という言葉を「属性集団」と言い換えた。属性集団という言葉については、質問紙に記載した次の説明文により、調査協力者に理解させた。「私たちは、様々な社会集団に属しています。例えば、性別、人種、民族、国籍、居住地域、社会経済的階層といったものがあります。ここでは、このような自分の意志や能力に関係なく所属が決まってしまうような集団について考えてください」。質問項目には 7 件法 (7 : 非常に当てはまる 1 : まったく当てはまらない) にて評定させた。ストレスコーピング尺度は尾関 (1993) のコーピング尺度の 14 項目を用い、4 件法 (4 : 非常に当てはまる 1 : まったく当てはまらない) にて評定させた。ストレス反応尺度は津田・マチュース・矢島 (2000) のストレスの主観的状態における「気分」12 項目を用い、4 件法 (4 : 非常に当てはまる 1 : まったく当てはまらない) にて回答させた。個人の自尊感情を測定するために Rosenberg (1965) により作成された個人自尊感情尺度の 10 項目を用い、5 件法 (5 : 非常に当てはまる 1 : まったく当てはまらない) にて評定を求めた。この尺度は著者らが中国語に翻訳して使用した。

結 果

各尺度について因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った結果、スクリー基準より、いずれの尺度も二因子解が妥当と判断された。再度二因子に設定して因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を実施した結果、二因子解が妥当とされた。以下にそれぞれの因子名を示す。集団自尊感情尺度では第一因子が所属する集団に対して、またその集団に属する自分に対するネガティブな

Table 1
 集団自尊感情尺度の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転）及び因子間相関

項目内容	F1 (否定的CSE)	F2 (肯定的CSE)	h^2
13. 私は、自分がこの集団の中の役立たずな一員だと感じる ことがしばしばある。	.793	.066	.633
12. この集団は、私が自分をどう人間であるかを考える ことに対して、あまり大きな意味を持っていない。	.733	.059	.541
4. 総体的に見れば、この集団は、わたしが自分自身に対して どう思っているかに影響が少ない。	.718	.149	.538
15. 一般的に言えば、他の人々は、私が分類されている様々な 集団を、価値のない集団だと考えている。	.711	-.088	.513
2. 私は、この集団の一員でなければよかつたのと思うこと がしばしばある。	.696	-.045	.486
5. 私は、自分がこの集団にあまり貢献していないと感じる。	.681	.046	.466
7. 多くの人々は、私の所属している集団は、全体的に見れば、 他の集団よりも能力が劣ると思っている。	.672	.002	.452
10. 私の所属している集団は、総体的に見れば、価値のない集 団だと感じるものがしばしばある。	.643	-.207	.456
3. 総体的に見れば、私の所属している集団は、他の人々か ら、良い集団だと思われる。	.075	.782	.617
8. 私の所属している集団は、わたしがどのような人間である かを表す重要な要素となっている。	.068	.759	.581
11. 全体的に見れば、私の所属している集団は、他の人々から 尊重されている。	-.004	.719	.517
14. 私は、自分が分類されている様々な集団に対して好意を感 じる。	-.163	.695	.510
6. 一般的に言って、わたしは、自分がこの集団の一員である ことに喜びを感じている。	-.097	.684	.477
9. 私は、協力的な態度で集団の活動に参加している。	.168	.671	.478
16. 全体的に言えば、集団成員の身分は、わたしの自己イメー ジを決定する重要な要素となっている。	-.048	.642	.414
1. 私は、この集団の価値ある一員だ。	.007	.620	.384
因子間相関	F1	1.000	
	F2	-.517	1.000

評価を問う項目群で構成されていることから、“否定的CSE”と命名した。また、反対に第二因子は属する集団及びそこに属する自分に対してポジティブな評価を問う項目群からなることから、“肯定的CSE”と命名した (Table 1)。

ストレスコーピング尺度について、第一因子は積極的
に問題に向き合い、解決していこうとする項目群からなるため“積極型コーピング”と命名した。第二因子については問題に向き合わず回避しようとする態度を示す項

目群からなり、“回避・逃避型コーピング”と命名した (Table 2)。

ストレス反応尺度では、第一因子は活動的というようにエネルギー反応がみられる項目群からなることから、“エネルギー覚醒反応”と命名した。第二因子は緊張し、活動的ではない反応を表す項目群からなるため、“緊張覚醒反応”と命名した (Table 3)。

個人自尊感情尺度において、第一因子は自己に対してポジティブな内容の項目群からなるため、“肯定的PSE”

Table 2
 ストレスコーピング尺度の因子分析結果 (主因子法, プロマックス回転) 及び因子間相関

項目内容	F1 (積極型コーピング)	F2 (回避・逃避型コーピング)	h ²
9. 問題の原因を見つけようとする。	.644	-.022	.415
14. 今の経験はためになると思うことにする。	.625	-.109	.403
3. 自分で自分を励ます。	.553	-.024	.306
1. 現在の状況を変えるよう努力する。	.517	-.096	.277
7. 人に問題解決に協力してくれるよう頼む。	.505	.124	.270
5. 物事の明るい面を見ようとする。	.414	.021	.172
12. 情報を集める。	.412	.064	.174
11. 自分のおかれた状況を人に聞いてもらう。	.363	.191	.168
2. 先のことをあまり考えないようにする。	-.188	.498	.283
8. 大した問題ではないと考える。	.081	.495	.252
6. 時の過ぎるのにまかせる。	.051	.479	.232
10. 何らかの対応ができるようになるのを待つ。	-.002	.455	.207
4. なるようになれと思う。	-.043	.427	.184
13. こんなこともあると思ってあきらめる。	.168	.404	.191
因子間相関	F1 1.000	F2 .017	1.000

Table 3
 ストレス反応尺度の因子分析結果
 (主因子法, プロマックス回転) 及び因子間相関

項目内容	F1 (エネルギー 覚醒反応)	F2 (緊張覚醒 反応)	h ²
8. 精神的である。	.733	.108	.549
11. 活動的である。	.701	.008	.491
5. 楽しい。	.683	-.060	.470
3. エネルギーギッシュである。	.656	.033	.431
1. しあわせである。	.606	-.045	.369
12. 満たされている。	.604	-.059	.368
7. 神経過敏である。	.077	.745	.561
10. 悲しい。	.036	.691	.479
4. 神経質である。	.086	.647	.426
9. 気がかりである。	-.120	.604	.379
6. 緊張している。	-.015	.508	.258
2. 不満である。	-.156	.493	.267
因子間相関	F1 1.000	F2 -.367	1.000

と命名した。第二因子については自己に対してネガティブな評価を行う項目群からなるため、“否定的PSE”と命名した (Table 4)。

各尺度において、因子ごとに Cronbach の α 係数を算出した。集団自尊感情尺度では否定的 CSE で $\alpha = .857$ 、肯定的 CSE で $\alpha = .847$ 、ストレスコーピング尺度では積極型コーピングで $\alpha = .722$ 、回避・逃避型コーピングで $\alpha = .606$ 、ストレス反応尺度ではエネルギー覚醒反応で $\alpha = .829$ 、緊張覚醒反応で $\alpha = .790$ 、個人自尊感情尺

度では肯定的 PSE で $\alpha = .831$ 、否定的 PSE で $\alpha = .776$ であり、いずれも十分高いといえた。

各因子における合計得点の平均値・標準偏差を Table 5 に示す。否定的 CSE において男性の方が有意に高かった [$t(356) = 1.30, p < .01$]。一方で、肯定的 PSE においては女性の方が有意に高かった [$t(356) = 1.70, p < .05$]。

相関分析 因子分析の結果に基づき、各因子の合計得点を用いて集団自尊感情とその他三尺度との相関分析を全体及び男女別に行った (Table 6)。

肯定的 CSE は、全体では回避・逃避型コーピング以外の全因子と有意な相関を示した。積極型コーピング、エネルギー覚醒反応、肯定的 PSE とは正の相関、緊張覚醒反応、否定的 PSE とは負の相関であった。男女別では、男子において緊張覚醒反応との有意な相関は示されなかったものの、その他の因子については男女ともに全体の傾向と同様であった。

否定的 CSE では、全体ではすべての因子との間に有意な相関が示された。回避・逃避型コーピング、緊張覚醒反応、否定的 PSE とは正の相関、また積極型コーピング、エネルギー覚醒反応、肯定的 PSE とは負の相関が示された。男女別ではエネルギー覚醒反応において有意な相関が示されなかったものの、他の因子では全体的場合と同様の傾向が見られた。

重回帰分析 ストレス反応に与える集団・個人自尊感情並びにストレスコーピングの影響を検討するため、ストレス反応の各因子得点を基準変数とし、集団自尊感情、

Table 4
個人自尊感情尺度の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転）及び因子間相関

項目内容	F1 (肯定的PSE)	F2 (否定的PSE)	h ²
1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である。	.826	.097	.692
2. 色々なよい素質を持っている。	.665	-.074	.448
4. 物事を人並みには、うまくやれる。	.642	-.045	.414
6. 自分に対して肯定的である。	.641	-.149	.433
7. だいたいにおいて、自分に満足している。	.612	-.060	.378
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。	.598	.144	.378
9. 自分はまったくだめな人間だ と思うことがある。	.077	.843	.717
10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だ と思う。	-.058	.751	.567
5. 自分には、自慢できる ところあまりない。	.111	.624	.402
3. 敗北者だ と思うことがよくある。	-.262	.464	.284
因子間相関	F1	1.000	
	F2	-.668	1.000

Table 5
各因子における合計得点の平均値，標準偏差

	全体(n=358)		男性(n=101)		女性(n=248)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
否定的CSE	22.791	9.637	24.743	10.589	21.956	9.201
肯定的CSE	40.620	8.987	39.941	9.391	41.012	8.932
肯定的PSE	24.165	5.032	23.446	5.775	24.435	4.765
否定的PSE	8.975	3.845	9.396	3.505	8.847	3.968
積極型コーピング	25.324	3.794	24.921	4.091	25.520	3.685
回避・逃避型コーピング	14.961	3.238	14.594	3.513	15.169	3.111
エネルギー覚醒反応	16.606	3.549	16.366	3.698	16.750	3.520
緊張覚醒反応	13.251	3.572	13.366	4.101	13.238	3.361

Table 6
集団自尊感情とストレスコーピング、ストレス反応および個人自尊感情との相関係数一覧

		積極型 コーピング	回避・逃避型 コーピング	エネルギー 覚醒反応	緊張覚醒反応	肯定的PSE	否定的PSE
肯定的CSE	全体	.365***	-.038	.362***	-.203***	.463***	-.310***
	男	.233*	-.013	.389***	-.139	.427***	-.164
	女	.420***	-.061	.349***	-.250***	.485***	-.374***
否定的CSE	全体	-.291***	.259***	-.109*	.386***	-.423***	.445***
	男	-.308**	.234*	-.112	.411***	-.433***	.416***
	女	-.279***	.303***	-.113	.392***	-.410***	.450***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 7

ストレス反応を基準変数，集団自尊感情とストレスコーピング，個人自尊感情を説明変数とした重回帰分析結果

説明変数	エネルギー覚醒反応 (B)			緊張覚醒反応 (B)		
	全体	男	女	全体	男	女
肯定的CSE	.243***	.385***	.180*	.020	.056	.006
否定的CSE	.193**	.317**	.143*	.189**	.253*	.186**
積極型コーピング	.217***	.258**	.204**	.064	.149	.048
回避・逃避型コーピング	.064	.023	.096	.105*	.179*	.035
肯定的PSE	.237***	.206	.242**	-.079	-.069	-.083
否定的PSE	-.086	-.149	-.101	.369***	.390***	.395***
調整済みR ²	.276***	.264***	.276***	.299***	.365***	.308***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

コーピング，個人自尊感情の各因子得点を予測変数として強制投入法で重回帰分析を行った (Table 7)。

エネルギー覚醒反応については，肯定的 CSE，否定的 CSE，積極型コーピング，肯定的 PSE が正の影響を及ぼしていた。次に，緊張覚醒反応については，否定的 CSE，回避・逃避型コーピング，否定的 PSE が正の影響を及ぼしていた。

考 察

本研究の目的は，中国人大学生の属性集団における集団自尊感情を測定するために渡辺 (1994) にない，属性集団における集団自尊感情をとらえる尺度を作成することであった。また個人自尊感情，ストレスコーピング，ストレス反応との関連から妥当性を検討した。結果として，集団自尊感情尺度は日本語版同様，肯定的 CSE と否定的 CSE との二側面が示された。これは自己の所属する集団に対して肯定的感情と否定的感情との両側面を持ち合わせていることを示している (渡辺，1994)。Cronbach の α 係数の値から信頼性は十分であると考えられた。また，各尺度との関係から，妥当性が確認された。

詳細にみると，集団自尊感情において，男性の否定的 CSE が女性より有意に高かった。これは，男性の方が集団内で重要な役割を求められ，また集団の成員からも期待が寄せられるため (黒川・吉田，2006)，よりプレッシャーやストレスが感じやすくなるのではないかと考えられる。

属性集団としての集団自尊感情とストレスコーピング，ストレス反応および個人自尊感情との関連について，一部を除いて有意な相関が示された。特に，肯定的 CSE は積極型コーピング，エネルギー覚醒反応，及び肯定的 PSE と正の相関を示した。つまり，自己の属する集団に

対してポジティブなイメージを持つ者はストレスが生じたときに積極的に対処しようとしやすく，またポジティブな気分を喚起させやすいということを示している。

また，男女の比較において，両者とも概ね同様の傾向を示した。しかしながら，肯定的 CSE と否定的 PSE とでは男性では有意な相関は見られず，女性にのみ有意な負の相関が示された。これは，女性は“女性である”という属性集団としての集団自尊感情を強く持つにつれ，個人自尊感情の否定的な側面が弱くなるという可能性を示唆するものである。

人は，肯定的な自己概念や自己の存在を示すために社会的アイデンティティの主観的価値を変え，自己意識を変化させてゆくことがある (石川，1992)。例えば，公共の場で騒ぐことは一般的には否定的なことであるが，ある集団内に身を置くことで逆にそれを肯定的にとらえるようになるといったことが挙げられる。このような価値変化を伴う同調行動は，日本人においては一般に女性のほうが男性よりも多くみられる。つまり，女性の方が集団を重視し行動することが示されており (吉田，2003；佐藤，1995)，中国人女性においても同様の傾向がみられるのではないかと推測できる。

重回帰分析の結果から，肯定的 CSE，否定的 CSE とともにエネルギー覚醒反応に影響を与えていることが示された。しかしながら，緊張覚醒反応では否定的 CSE の影響のみが示された。

問題点として，本研究では集団自尊感情の“集団”には性別や民族といった制約を設けていなかった。集団自尊感情尺度で測定されたのは属性集団であるが，一般にそれらが性別や民族といった特定された集団を指し示すことは少ない (松田・稲本・小林・宮西・元好・福井，2002)。そのため，回答に際してはその個人が属するあらゆる属性集団がイメージされることが推測され，また調査協力者がどのような集団を想定して回答したのかを

知ることは難しい (松田ら, 2002)。

さらに、本研究で示された集団自尊感情の二要因の違いによりストレス反応やストレスコーピングの違いがみられることが考えられるため、今後より詳細な分析が必要である。

引用文献

- 浅川潔司・東 由佳・古川雅文 (2001). 青年期の社会的スキルと学校適応に関する心理学的研究 兵庫教育大学研究紀要, 21, 99-103. (Asakawa, K., Azuma, Y., Kogawa, M. (2001). A psychological study on the relation between social skills and school adjustment in adolescence. *Hyogo University of Teacher Education journal*, 21, 99-103.)
- Goldschmidt, W. (1974). *Ethology, ecology and ethnological realities*. In G.V. Coelho, D.A. Hamburg, and J.E. Adams (Eds.): *Coping and adaptation*. New York: Basic Books, 13-31.
- Hong, Y. (2009). Relationship between individual self-esteem, collective self-esteem and behavioral inhibition for college students. *The Research Journal of China Educational Development*, 6, 9-10.
- 石川 准 (1992). アイデンティティ・ゲーム 新評論
- 小嶋祐輔 (2008). 現代中国社会における「漢化」日本文化人類学会研究大会発表要旨集, 267.
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2006). 個人 集団間の役割期待遂行度が仲間集団関係満足度に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 45, 111-121. (Kurokawa, M., & Yoshida, T. (2006). Effects of peer-group role-expectation fulfillment on relational satisfaction. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 45, 111-121.)
- Liang, C. T. H. & Fassinger, R. E. (2008). The role of collective self-esteem for Asian Americans experiencing racism-related stress: A test of moderator and mediator hypotheses. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, 14, 19-28.
- Luhtanen, R., & Crocker, J. (1992). A collective self-esteem scale: Self-evaluation of one's social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 302-318.
- 松田信樹・稲本和子・小林未紀・宮西智子・元好理恵・福井 斉 (2002). 集合的自尊感情研究の概要 大阪大学教育学年報, 7, 61-70. (Matsuda, N., Inamoto, K., Kobayashi, M., Miyanishi, S., Motoyoshi, R., Fukui, H. (2002). A review of studies on collective self-esteem. *Annals of Educational Studies*, 7, 61-70.)
- 尾関友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の改定：トランスアクション的な分析に向けて 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
- Parsons, T. (1940). An analytical approach to the theory of social stratification. *The American Journal of Sociology*, 45, 841-862.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: University Press.
- Sánchez, F. J., & Vilain, E. (2009). Collective self-esteem as a coping resource for male-to-female transsexuals. *Journal of Counseling Psychology*, 56, 202-209.
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, 3, 11-20.
- Sherman, S., Hamilton, D. L. and Lewis, A. C. (1999). *Perceived entitativity and the social identity value of group memberships* in Abrams, D. and Hogg, M. A. (Eds.) *Social Identity and Social Cognition*, Oxford: Blackwell.
- Tajfel, H. (1981). *Human groups and social categories: Studies in social psychology*. Cambridge University Press.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). *An integrative theory of intergroup conflict*. In W. G. Austin, & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks/Cole. 33-48.
- 津田 彰・マチューズ, G・矢島潤平 (2000). ストレス状態と特性 丹野義彦 (編) 現代のエスプリ 392, 至文堂 106-117.
- 渡辺 聡 (1994). 日本語版集団自尊心尺度構成の試み 社会心理学研究, 10, 104-113. (Watanabe, S. (1994). An attempt to construct the Japanese collective self-esteem scale. *Japanese Journal of Social Psychology*, 10, 104-113.)
- Xue, S., & Li, Y. (2007). Relationship between collective self-esteem, self-esteem and depression, anxiety on freshman. *Chinese Journal of Clinical Psychology*, 15, 612-616.
- 吉田浩子 (2003). 大学生の友人関係 5つの大学におけるグループの特徴に関する調査から 川崎医療福祉学会誌, 13, 173-186. (Yoshida, H. (2003). University student relationships-An analysis of questionnaire surveys from five universities-. *Kawasaki Medical Welfare Journal*, 13, 173-186.)
- Zhang, L. & Liang, Z. (2002). Athletes' life satisfaction: The contributions of individual self-esteem and collective self-esteem. *Acta Psychologica Sinica*, 34, 160-167.